

この言葉 (4)

隠すことがなければプライバシーの権利を気にする必要がないというのは、話したいことがなければ言論の自由は必要ないというのと同じくらい危険なことです。

「あんた、共産党か？何か悪い事しようと思っとるから、そんなビラまいとんとちがうか？みんな、そう思うで。」

先日、駅前で共謀罪反対のビラをまいているとき、一人の男性からかけられた言葉だ。なるほど、この人たちはテロを計画しているから共謀罪に反対しているんだ、というのが一般の認識なのだということに初めて気がついた。

共謀罪に対する認識がいまひとつ広がらない理由もこんなところにあるのだろう。「何も悪いことをしない自分には関係ない」という人に、「いいえ、そんなあなたにも関係があるのですよ」と説得することは難しい。私にも自信はない。

上に挙げた言葉は『スノーデン 日本への警告』（集英社新書 0876A）の中の一文だ。

「危険な活動に関与していない自分は監視されても問題ない、という考えを持つ人々に、あなたのメッセージを伝える方法を教えてください」という問いに対して、スノーデンは「プライバシーの重要性」をキーワードとして次のように答えている。私も知りたいところだった。

「プライバシーとは、悪いことを隠すということではありません。プライバシーとは力です。プライバシーとはあなた自身のことです。プライバシーは自分であるための権利です。他人に害を与えない限り自分らしく生きることのできる権利です。（中略）権利は少数派を保護するものです。ほかの人とは異なる人たちを守るために権利は存在します。権利は弱い人を保護するために存在するということを覚えていなくてはなりません。」

私たちが日常、「それはプライバシーの侵害だ」と口にすることはある。関係ない人が自分のプライバシーに触れてきたら、守ろうとする。それを逆手にとるように、現在、日本の至る所で「個人情報」という言葉が飛び交い、店で買い物をして、何か登録をして、「これは個人情報に当たりますから」と、あたかもそれを守るかのように、シールを張ったり、破棄したり、という行為が目の前で行われる。しかし、私たちは知っている。これらはすべてジェスチャーに過ぎないことを。どこで電話番号や住所を調べたのか分からないが、アンケートの電話がかかってくる、書状が届く。ネットで買い物をすると、「あなたに興味のある商品」の案内が届く。家族でも知らない「私の嗜好」を誰かが把握している。数メートル歩く間に数十台の防犯カメラが私を撮影している。

私も含めて、このような監視社会に住んでいることを知っていても、特に文句を言うべくわけでもなく、それが普通になってしまっている。犯罪事件が起こって、防犯カメラに写っていた犯人が捕まると、「すごいね」などと言いながら、自分は関係ないから、と考えるしまう。監視社会が益々力を強め、私たちががんにがらめに締め付けられていることに気づ

くときになって、ようやく「プライバシーとは何か」について考え声を上げて、間に合わない。

本書でスノーデンは国家安全保障局での仕事を通して知り得た監視プログラムについて語っているが、その内容は一般の国民には想像を絶するような複雑さと多様性、規模を持ったもので、もちろんプロでなければ理解もおぼつかないような事項もある。その国家機密の暴露に彼を駆り立てたのは「民主主義遵守」の思想だった。

私は「民主主義」「プライバシー」といった、慣れ過ぎていた言葉の原点に立ち返って、現実を見る必要性を彼から学んだ。この世界で繰り返されている驚くべき多くの事実とともに、「生きるとはどういうことか」を思索する彼の行動の意味を教えられた。

日本の人々に対する彼のメッセージ

「第一に関心を抱いてください。プライバシーとは何かを隠すことではありません。守ることです。立ち上がり、自分の権利を守らなければ、そして政府が適切に運営されるよう努力しなければ、権力の腐敗が起こります。」

「人と話して下さい。価値観を共有して下さい。会話をして下さい。議論をして下さい。そして決して恐れないで下さい。リスクを認識すること、それが現実にあると認識することは大事なことです。」

「行動を怖がらないで下さい。過ちを見つけたならば、すぐに行動に移して下さい。既定路線になる前に動いて下さい。政府の方針となることを待たないで下さい。物事を注意深く見て下さい。よく考えて下さい。受け身にならないで下さい。そして最後にこのことを忘れないで下さい。自由を享受できる社会は市民が主役になって初めて実現されるということを。」

2017年6月29日 扇千恵記